

漆糸の研究と製品制作

編み目の活用

A2201411 菅野麻結

研究の背景

漆製品の大半はあらかじめ成型した器や箱等に漆を塗っている。ところが、縄文時代の発掘品に、漆を塗り硬化する前に成形されたものがある。奥会津の三島町荒屋敷から出土している糸玉がこの製法だといわれている。これは一本一本の繊維に漆を塗り、漆が固まる前に糸の束を纏めて結び、目をつくったものである。漆を後から塗ってはいは、このような繊維の流線を残すことは出来ないであろう。

また、奥会津には編み組細工という経済産業大臣指定の伝統工芸品がある。植物性の皮や繊維を縫って編み込み様々な生活用品を製作し販売しており、その中の一つに鞆も紹介されていた。自然素材の素朴さや味が感じられ、シンプルなデザインが多く見られる。そこで、同じ地域から発掘された糸玉とも関連付け、新たな編み組細工としての提案を試みる。

研究の目的

『常日頃から身近で使用でき、普段の生活にとけ込むような漆製品の提案』

『調査を通じ、その製品の改善点を考察』

『制作を通じ、素材となる繊維や紐に漆を含ませ、編みこむための技術についての考察』

研究のプロセス

漆と糸についての研究

- ・糸の種類と太さや本数を調節し、固まったときの硬さと発色具合・漆の浸透度合いを調べた。
- ・固めに使う漆の希釈具合についても数パターン試し、丁度良いものを探した。
- ・結果、紙と木綿製の糸を使用し、漆の希釈の割合についても決定した。

編み組細工と製品についての調査

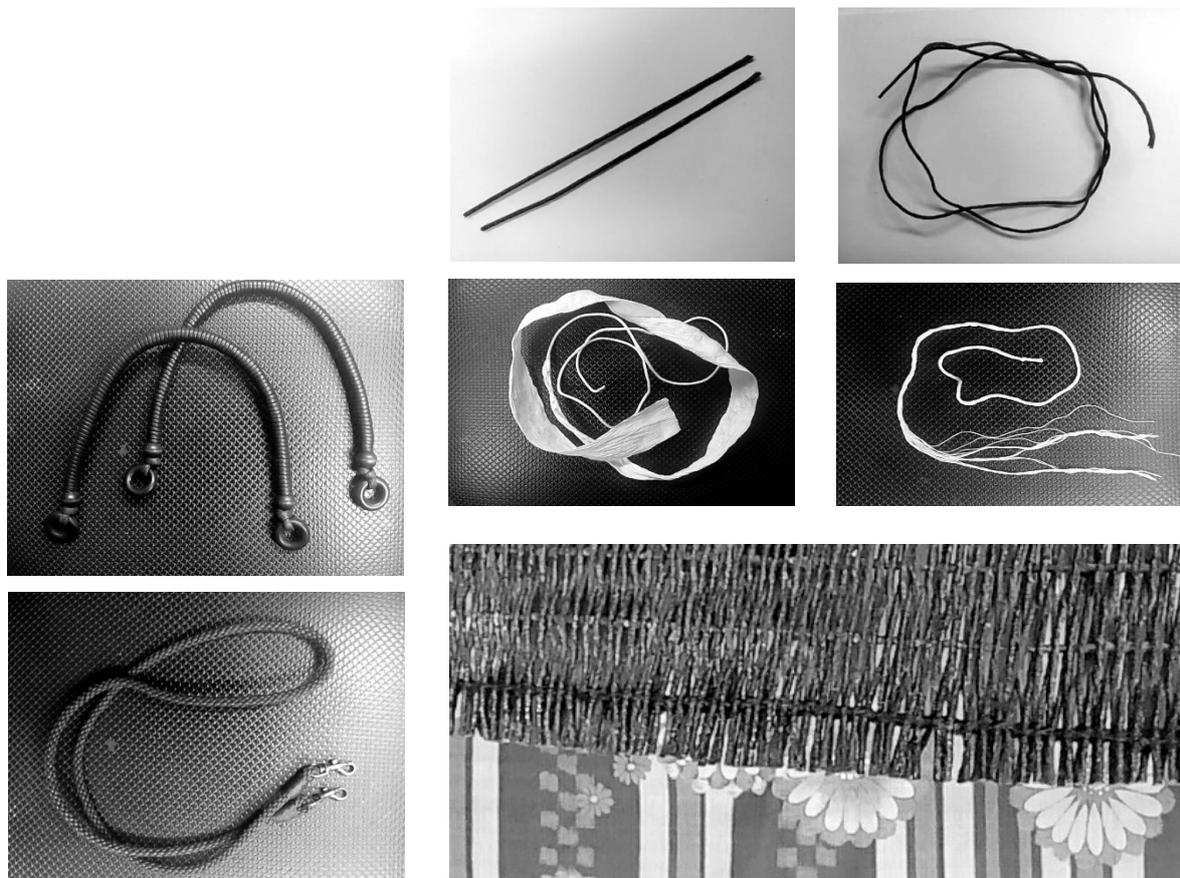
- ・固めた糸の硬度から竹編みも参考にし、編み方を思案した。
- ・鞆のデザインについてはアンケート調査を実施し、その結果を考慮しつつ制作の中で変更を加えていった。
- ・紙の糸と縫り合わせた複数の木綿の糸を漆で固め、強度を上げつつわずかに染色した。
- ・簡易的な織機を作成し、漆糸を張り織り込んでいった。
- ・漆生地を制作しつつ、漆の色味に合う他のパーツをそろえた。
- ・持ち手と肩掛け用の紐には木綿製のものを使用し、鞆の側面にはダークブラウンの革を使う事とした。
- ・内側につける裏地には、派手になり過ぎないような大柄の布を選んだ。

成果物

外見は暗い褐色系の色味で統一した。鞆の表面は木綿糸と紙糸の織り生地と革製の生地を使用し、これらは同系色の革紐で縫いつけてある。

中の裏地には落ち着いた花柄の布が使われているため、編み目の隙間からも柄がのぞくようになっている。

全体のふちを括る革紐で編みこむように持ち手を取り付けた。肩掛け用の紐は取り外しが可能になっている。



考察

もともと、漆糸の編み組細工という提案から、鞆を製作するにいたった。漆での加工作業には予想外の出来事が起き、思うように進まないことを歯がゆく感じることもあった。

当初はアンケートの結果を中心に制作を進める予定でいたが、制作の過程で形状などを大きく変更することになった。理由として、制作研究していく中で漆繊維の硬度と太さの関係から、機能性やデザイン性・用途について若干の変更が必要となり、さまざまな使用者の状況に合うデザインとすることが難しかったということがあげられる。しかしながら、最終的には落ち着いたデザインをコンセプトにすえて構成することができた。奥会津編み組み細工の山ぶどうのかごも同じような風合いであるが、さらに改良を進めることで、縄文の漆糸と共に新たな製品につながるのではないかとと思われる。